



なまめく美人三姉妹

レオタードの誘惑

早瀬真人

挿絵/猫丸

立ち読み版

第一章	美人姉妹のダブル手コキ	4
第二章	豊満女教師の肉弾色仕掛け	42
第三章	恍惚と悦楽の童貞喪失	82
第四章	セクシー女教師との肉悦地獄	124
第五章	可憐な美少女との初体験	172
第六章	永遠へと続く姉妹どんぶり	215

登場人物

Characters

清瀬 卓郎

(きよせ たくろう)

緑泉高校の一年生。高校進学前の春休みに、一人旅の旅先で滞たち三姉妹と出会う。優柔不断な面がありつつも、困った人を助けようとする正義感も持ち合わせる少年。

川村 澪

(かわむら みお)

黒髪ロングヘアの純情可憐な美少女。緑泉高校で卓郎と同学年。優しくて大人しい性格だが、性には興味津津なお嬢様。体操競技を長くやっていたためスレンダーな体型。

川村 友梨香

(かわむら ゆりか)

美人三姉妹の次女。緑泉高校三年で新体操部所属。セミショートの黒髪、スリムな体型、やや吊りあがった目尻が気の強そうな印象を与える。元彼に振られて失恋中。

川村 杏奈

(かわむら あんな)

美人三姉妹の長女。姉御肌タイプの豊満女教師で、新体操部顧問の二十六歳。全身からセクシーな雰囲気醸しだしている、いかにも成熟した大人の女性。

第二章 豊満女教師の肉弾色仕掛け

1

四月七日、緑泉高校りよくせんに入学した卓郎は、初登校の日を迎えた。

教室内を見渡せば、新入生たちは皆、期待と不安を胸に抱いているようだった。

緑泉は男女共学だったが、男子よりも女子の生徒数が多く、かわいい女の子の姿もちらほらと見える。

だが卓郎は彼女たちには見向きもせず、椅子に座ったまま、気難しそうな顔つきを
していた。

(あ……また皮が元に戻っちゃった)

パンツの中で包皮が亀頭を包みこんでいく感触は、なんとも気持ちが悪い。

杏奈の指摘を受け、一人旅から戻った卓郎は、その日から包茎矯正を試みた。

ところが過敏な亀頭部がパンツにこすれ、ひりひりとした痛みを与えてくるばかりか、何度剥き下ろしても、元の状態に戻ってしまうのだ。

「はあっ」

卓郎は一転して、小さな溜め息をついた。

(やっぱり……連絡先を聞いておけばよかった)

手コキで大放出した次の朝、四人のあいだに漂う気まずさは尋常ではなかった。

シラフに戻った杏奈と友梨香の顔には、とんでもないことをしてしまったという後悔の色がありありと浮かんでいた。

卓郎にしても、射精の瞬間を可憐な美少女に見られたという羞恥から、ほとんど会話を交わすことができず、逃げるようにロτζジをあとしたのである。

連絡先を交換しなかったことで、美人三姉妹はおそらくホツとしたに違いない。二度と会うことはないだろうし、きれいさっぱり忘れられると……。

旅の恥はかき捨てという諺があるが、そのときは卓郎もそれでいいと思った。

十五歳の童貞少年が、夢のような出来事を体験したのである。

それだけでも満足しなければと考えた。

ところが滯の愛くるしい顔が脳裏から離れず、もう一度会いたいという願望が日ごと膨らんでいった。

今さら悔やんでも悔やみきれない。

別荘から、何とか個人情報を知り得る方法はないものか。

(でも……どうしたらいいのか、全然わからないよ。川村という苗字も、決して珍しくはないし)

再び溜め息をついた瞬間、教室の扉が開き、担任らしき一人の女性が入室してくる。紺色のスカートスーツに、胸元にレースのフリルがついた白いブラウス。

凜とした姿を目にした卓郎は、徐々に目を大きく見開いていった。

(あ、あ、あ……嘘っ!! あ、杏奈さん!?)

別荘でのセクシーな雰囲気は微塵もなく、別人のような佇まいを見せているが、杏奈本人に間違いなかった。

「今日から、一年D組を担当することになった川村杏奈、女子の体育を担当していきます。これからの一年、みなさんといっしょに勉強していくことになるけど、どうかよろしくね」

親しみを感じさせる笑顔と、ハスキーがかった声だけは変わらない。

「あの……先生はおいくつなんでしょうか? 結婚してるんですか?」

窓際の男子生徒が恐るおそる問いかけると、杏奈は苦笑交じりに答えた。

「二十六よ、残念ながらまだ独身。実は私にとって、このクラスは初の受け持ちにな

るの。そういった意味では同じ新人だし、みんなからいろいろと学ばせてほしいわ」
凜々しい女教師は、そう言いながら教室内をグルッと見渡す。

卓郎と視線がかち合った瞬間、彼女は明らかに頬を強ばらせた。
おそらく、自分も似たような顔つきをしているのだろう。

「そ、それじゃ、入学式が始まるから体育館に集まって。ホームルームの続きは、そのあとにしましょう」

動揺を悟られたくないのか、杏奈は即座に教室の出入り口に促す。

生徒たちが次々と席を立つなか、卓郎はまだ惚けたように固まっていた。

（し、信じられない。杏奈さんが教師で、しかも自分の担任になるなんて。俺、まだ夢の続きを見ているのか？）

気がつくと、椅子に腰掛けているのは自分一人になっていた。

慌てて立ちあがり、扉の前に佇む杏奈のもとに歩み寄る。

怖くて、目を合わせることができない。

俯いたまま教室から出ようとすると、白魚のような指が学生服の袖口をつまんだ。

この指がペニスを握り、射精まで導いてくれたのだ。

下腹部がモヤッとした瞬間、杏奈は小さな声で言い放った。

「まさか、あなたが私の教え子になるなんて。クラス名簿にあなたの名前を見つけたときはドキリとしたけど、苗字までは覚えてなかったから」

「ぼ、僕も……びつくりしました」

顔を上げると、美人教師はやや血の気を失い、いかにも困惑といった表情をしている。

「あ、あの……澪ちゃんは、お元気ですか？」

「元気も何も、緑泉に登校しているわよ」

「え、え、え!! 彼女も、この学校の生徒だったんですか!？」

「しっ! 声が大きいわ」

「す、すみません」

廊下側には、まだ生徒がいるかもしれない。

卓郎が首を竦めると、杏奈は小声で言葉を連ねた。

「澪はA組、友梨香も緑泉の三年生よ」

淫らな体験をした美人三姉妹が、同じ学校に通っている。

その事実を知っても、今の卓郎にとっては、うれしさよりも驚きのほうが圧倒的に大きかった。

「とにかくホームルームが終わったら、体育講師室に来てちょうだい。講師室は体育館のとなりにある文化館の三階、一番角の部屋よ」

「わ、わかりました」

「それじゃ、体育館に行きましょう」

杏奈は教室を出ながら、「はあつ」と、深い溜め息をつく。

彼女にとつても、かなり衝撃的な出来事だったようだ。

（そりゃ、そうかもな。いくら酔っていたとはいえ、教師が教え子に手を出しちゃったんだから。バレたら、大変なことになる。体育講師室に来てくれて、やっぱり口止めするのかな？）

もちろん、別荘での甘美な体験を誰にもしゃべるつもりはなかった。

あの素晴らしい思い出は、自分の胸の中だけにしまっておきたい。

美人教師を窮地に陥れても、卓郎には何の得にもならなかった。

（それに……これからの三年間、澪ちゃんと学園生活を送ることになるんだし）

美少女の可憐な笑顔と、別荘での淫靡な体験が脳裏を駆け巡る。

女教師のあとに続きながら、卓郎は徐々に湧きあがる喜びをじっくりと噛みしめていた。

翌日の放課後、卓郎は嬉々とした表情で体育館に向かった。

昨日の講師室では、予想に反し、杏奈が保身に走るようなことはなかった。

ただひと言、「あのことは秘密よ」と、笑顔で告げられただけだ。

正直に言えば、微かな期待がなかったわけではない。

この一ヶ月、包茎を剥き下ろされたシーンを思いだしては、何度もオナニーを繰り返したのである。

ひよっとして、またおいしい体験が待っているのではないか。

もつといやらしい行為を仕掛けてくるのではないか。

だが杏奈の話は、自分が顧問を務める新体操部に終始していた。

彼女は元新体操の選手で、国体にも出場経験があるらしい。

なぜ男子の自分にそんな話かと思いつつも、入部しないかと誘われたとき、卓郎はぼかんと口を開け放つばかりだった。

杏奈の話によると、最近是新体操をする男子が徐々に増えてきているらしい。

緑泉高校にも、いずれ男子新体操部を作りたいので、ぜひ協力してほしいというのである。

卓郎は、どうしても首を縦に振ることができなかった。

特に入部したいというクラブはなかったものの、さすがに女子ばかりの新体操部は抵抗がある。

はつきり断ろうとした卓郎を思いとどませたのは、滯が入部予定という話を聞いたからだった。

卓郎はD組、滯はA組と、接点がないうえに、二年、三年になってもクラスメートになるとは限らない。

だが同じクラブに所属していれば、しょっちゅう顔を合わせることになるのだ。

美少女との仲を深めるには、まさに絶好の機会ではないか。

聞くとところによると、四月の一ヶ月間は仮入部扱いで、いつでも辞めることができるらしい。

新体操部には友梨香も所属しているようで、美人三姉妹が顔を揃える光景を思い浮かべた卓郎は、最終的に杏奈の誘いを受けたのである。

二度と会うことがないと思われた滯との再会。

足は自然とスキップをしているように弾み、高揚感が全身を包みこんだ。

体育館に足を踏み入れると、すでに杏奈と部員たちは集合していた。

制服姿の女子生徒たちが、仮入部の一年生だろうか。

彼女たちはみんな背を向けていたが、その中の一人、黒艶を放つロングヘアには見覚えがある。

（あ、あの子が、きつと濡ちゃんだ！）

杏奈が部活内容を説明するなか、卓郎はほくほく顔で、音を立てないように濡の背後に近づいた。

「部活動は週に三日、火水金よ。場所は、この体育館を使用します。今日のところは、一年生は見学してちょうだい。明日からは、学校指定のジャージで参加すること。何かわからないことがあったら、私や先輩部員に遠慮なく聞いて」

杏奈のとなりには、白いジャージを着た友梨香が佇んでいる。

目が合った瞬間、勝ち気な少女は特別驚いた様子もなく、心なしか口元を引き攣らせたように見えた。

（杏奈先生から、俺と会ったことを聞いているんだ。ということは、濡ちゃんも知っているわけだよな）

みっともない姿を見せつけた羞恥は残っているものの、今は美少女との再会を素直に喜びたい。

卓郎は緊張から、心臓の鼓動をトクトクと拍動させた。

「それじゃ、練習を始めましょう」

杏奈の合図で、二年生と思われる女子部員たちが練習の準備を整える。

新体操部の部員は、全部で十人ぐらいだろうか。

仮入部の生徒は、卓郎を入れて六人。もちろん、他に男子は一人もいなかった。

「見学の人たちは、端のほうに寄ってもらえる？」

制服姿の女子生徒たちが、ぞろぞろと体育館の端に向かって歩いていく。

ここぞとばかりに滯の肩を軽く叩くと、美少女はびっくりした顔つきで振り返った。

黒目がちの瞳は深く澄み渡り、愛くるしい容貌は、相変わらずの眩しい輝きを放っている。

「ひ、久しぶり」

「……あ、卓郎君」

小声ながらも、目いっぱい笑顔を振りまいたつもりだった。

だが滯の表情は固く、頬が明らかに強ばっている。そして、いかにも気まずそうに

視線を逸らした。

「元氣……だった？」

「……うん。卓郎君は？」

「全然、元氣だよ」

「新体操部に入るの？」

「いや、それは……まだはつきりとは決めてないけど」

「……そう」

話したいことはたくさんあるはずなのに、言葉が口をついて出てこない。

やがて部員たちの練習が始まり、クラシック音楽の旋律が館内に流れだすと、滯は卓郎のそばからスッと離れ、一年生女子のもとへ駆け寄っていった。

美少女のよそよそしい態度に、冷や水を浴びせられたように心が冷えていく。

ロッジで見た情けない姿に、幻滅しているのだろうか。

先輩部員たちはいつの間にかジャージを脱ぎ捨て、レオタードに包まれたしなやかな肉体を躍動させている。

ややハイレグ仕様の薄い布地は、童貞少年には刺激的な代物だったが、今の卓郎の目にはまったく映らず、ただぼんやりとした顔つきで練習風景を見つめるだけだった。

(やっぱり、仮入部はやめよう)

初日の練習が終了したあと、卓郎は講師室に向かった杏奈のあとを追った。滯のつれない態度、友梨香のいかにも煙たそうな表情。

仮入部は、一日目にして限界だった。

男子生徒が他にいたら、多少は気が紛れたかもしれない。

だが女の中に男一人の状況は、やはり特異な印象を与えたようだ。

話しかけてくる部員や一年生女子は一人もなく、卓郎は疎外感をたつぷりと味わった。

そもそも杏奈の誘いを受けたのは、少しでも滯との距離を縮めたかったからである。彼女の様子を見た限りでは、交際などは夢のまた夢。

初日からこの調子では、とても続けていく自信などない。

文化館の階段を駆けのぼると、杏奈はちょうど講師室の扉を開けたところだった。

「先生！」

「あら、今日はごくろうさま」

「ちよっと、お話がしたいんですけど」

「それはいいけど、どうしたの？ 血相を変えて。まあ、お入りなさい」

室内に促された卓郎は、丸椅子に座るやいなや、仮入部を取り消したい旨を簡潔に伝えた。

「どういうこと？ まだ初日だっていうのに」

「部員たちはよそよそしいし、男が僕だけというのはやっぱりつらいです。どうか辞めさせてください！」

今の気持ちを正直に告げたとたん、杏奈は困惑顔で答えた。

「こ、困るわ。今、辞められたら」

「どうしてですか？」

「それは……昨日も話したでしょ？ 新体操男子部を作りたい、だから協力してほし
いって。他の男子生徒も、これから勧誘していくつもりよ。だから、たった一日で辞
めるなんて言わないでほしいわ」

凜とした女教師は、明らかにうろたえている。

次の瞬間、卓郎の頭の中にある疑念が浮かんだ。

(ひょっとして先生、口封じのために俺を新体操部に入れたんじゃない?)
他言しないという確信が得られるまで、自分のそばに置き、監視するつもりなのか
もしれない。

卓郎は息を吸いこみ、はつきりとした口調で言いきった。

「ロッジの件は、誰にもしゃべりませんから。どうか安心してください」
「そ、そんなこと……」

杏奈はバツが悪そうに視線を逸らし、蚊の泣くような声で答える。
やはり女教師は、別荘の件を第三者に知られるのが怖かったのだ。

卓郎は、肩をがっくりと落とした。

彼女の立場は十分わかるが、誘いをかけてきた理由がはつきりした以上、新体操部
にとどまる必要性は何もない。

(澪ちゃんと仲よくなれるなら、話は別だけど……)

卓郎は椅子から立ちあがると、頭をペコリと下げた。

「それじゃ、これで失礼します」

講師室の出口に歩を進めた瞬間、背後から杏奈に呼びとめられる。

「清瀬君、待って」

「何ですか？」

「滯とのこと、どうするつもり？」

「は？」

「好きなんでしょ、あの子のこと」

「どうするも何も、ほとんど無視されていたんですから、どうにもならないですよ」

自嘲気味に答えた直後、杏奈は一転してほくそ笑んだ。

「昨日ね、あなたが緑泉に入学していたことを教えたの。そしたらあの子、すごく喜んでたわよ」

「え？」

「もちろん表情には出さなかったけど、姉の私にはわかるわ。頬が緩んで、目がきらめいていたもの」

「ホ、ホントですか？」

今度は、卓郎がうろたえる番だった。

自分でも単純だとはわかっていたが、喜びが身体の内から込みあげてくる。

「恥ずかしかつてるのよ。だって、そうでしょ？ あの子は私や友梨香と違って純情だし、どんな顔をして会えばいいのか、わからなかったんだと思うわ。今日だって、

朝からそわそわして、全然落ち着きがなかったんだから」

卓郎も、まったく同じだった。

朝まで眠れず、寢床で何度も寝返りを打った。

授業中もうわの空で、どう話しかけたらいいのか、ずいぶんと頭を悩ませたものだ。

「気まずい雰囲気なんて、日が経てば、そのうちなくなるわよ」

「そ、そうでしょうか？ てつきり嫌われてるんじゃないかと思ったんですけど」

「嫌いになるはずないでしょ。だって私と友梨香が悪いんだから、清瀬君には何の罪もないじゃない。まあ、多少のショックは受けただろうけど」

「……ですよ」

大股開きで勃起を見せつけ、派手に大量射精した事実を消し去ることはできない。

今さらながら、恥ずかしさで顔が熱くなってくる。

「あなたが肩身の狭い思いをしないように、私もフォローしていくつもりよ。新体操

部で、がんばってくれるわね？」

滯のそばにいたいという気持ちはあったが、男子が一人だけという環境で本当にや

っていけるのだろうか。

友梨香や他の女子部員たちのシラツとした対応を思いだすと、やはり迂闊にイエス

とは言えない。

「少し考えさせてもらってもいいですか？」

正直に答えると、杏奈は突然口元に妖しげな笑みを浮かべた。

「そんなことを言つて、このまま部活には出てこないつもりなのね」

「い、いえ……決してそういうわけじゃ」

「残念だわ。新体操部に入部してくれたら、すごく楽しいことが待っていたのに」
「え？」

豊富な女教師は目をスッと細め、ゆっくりと近づいてくる。

別荘で出会ったときの、セクシー美女の顔つきにそっくりだった。

微かなコロンの香りが鼻腔をくすぐり、室内が一瞬にして淫靡な雰囲気に含まれる。

卓郎がたじろいだ瞬間、しなやかな手が股間の膨らみにあてがわれた。

「あうっ！」

快感電流が脊髄を駆け抜け、思わず爪先立ちになってしまう。

「どんな楽しいことなのかは、わかるわよね？」

「はううううっ」

手のひらがズボンの中心部を撫であげるたびに、凄まじい速度で血液が海綿体に集

中していく。

ペニスはあつという間に硬直し、すぐさま三角の頂を描いていった。

「相変わらず、精力旺盛なのね」

しつとりと潤んだ瞳、濡れた唇がなんとも悩ましい。

脳内がバラ色の霧に包まれ、早くも思考回路がショートした。

(ま、まさか……杏奈先生とエッチできるんじゃない?)

十代の少年の頭の中は、異性の身体、性への興味でいっぱいだ。

まだ見ぬ女の裸体を、この目で拝みたい。

あそこはいつたいていどうなっているのか、じっくりと観察したい。

そして手や口、舌で女体を触感し、一日でも早く童貞を捨てたかった。

相手が年上の美人教師なら、文句などあろうはずがない。

今の卓郎は、身も心も完全に性欲一色に染まっていた。

杏奈が最後の手段とばかり、ハレンチな懐柔策に走ったことにも気づかず……。

「ジャージの下を見たい?」

耳元で甘く囁かれ、卓郎は背筋をゾクゾクさせた。

もちろん、見たいに決まっている。

コクコクと頷くと、杏奈はスツと離れ、ジャージのジツパーを引き下ろしていった。前合わせがはらりとほだけ、白いインナーが覗き見える。

Tシャツだろうか、前方にドンと突きだした肉の山脈は相変わらずの迫力だ。

卓郎が生唾を飲みこんだ直後、女教師はスポーツシューズを脱ぎ、続いて下のジャージに手を添えた。

布地が、むっちりとした白い肌の上をゆつくりとすべり落ちていく。

(ああ、せ、先生の太腿だ！)

セクシー教師の脱衣シーンは、峻烈な刺激を童貞少年に与えた。

淫情と期待がぐんぐんと膨らみ、股間の肉槍がドクンと脈打つ。

杏奈がジャージを足首から抜き取り、さらに上着を脱ぎ捨てると、卓郎はあまりの感激に目をひんむいた。

(レ、レ、レオタードだ!!)

純白のレオタードは、いっさいの装飾が施されていない質素なものだったが、それだけに身体の稜線がはっきりとわかる。

胸元から今にもこぼれ落ちてきそうな乳房、キュッと引き締まったウエスト、パンと張り出した腰回り。

ややハイレグ仕様のVゾーンは、布地の裾が股の付け根にびっちり食いこみ、こ
んもりとした恥丘の膨らみをこれでもかと際立たせていた。

ふっくらとした内腿の脂肪が、秘園を隠すように迫りあがっている。

蕩けるような美肉の競演を目にしているだけで、息継ぎがうまくできず、胸が重苦
しかった。

全身の血液が沸騰し、脳みそがグラグラと煮え滾っているようだ。

杏奈が微笑をたたえながら近づいてくると、卓郎は狼に見据えられた子羊のように
身体を震わせていた。

4

「ふふっ、顔がトマトみたいに真っ赤。かわいいわ」

女教師に制服の上着を脱がされても、卓郎はひと言もしゃべることができず、棒立
ち状態のままだった。

あらゆる淫らな妄想が脳裏に渦巻き、正常な思考が働かない。

まるで、自分が自分でなくなってしまうたかのようなようだ。

股間の逸物は勃起状態を維持し、すでに先走りの液が大量に滲みだし、パンツの裏地はヌルヌルの状態だった。

ズボンのベルトが、カチャカチャと音を立てて外される。

ジッパ―が引き下ろされ、しなやかな指がウエストの上縁にあてがわれる。

「さあ、一ヶ月前よりも成長したかしら？」

ズボンがブリーフとともに剥き下ろされたたん、剛直は扇状に跳ねあがり、包皮を被った亀頭部が下腹を激しい勢いで叩きつけた。

(あああああっ！)

粘った透明液が翻り、凄まじい羞恥と情欲が身を焦がしていく。

女教師はほくそ笑みながら、少年の若莖に熱い眼差しを注いでいた。

(見られてる！ 杏奈先生に、またおチンチンを見られてるう!!)

絡みつくような視線を受け、ペニスは頭をビクビクと振った。

「相変わらず、いいモノを持つてるのね。タマタマもずっしりと重くて、いやらしいお汁がたくさん詰まってそう。この前より、少し大きくなったんじゃない？ オナニばかりしてたんでしょ？」

ズバリと言いついて、顔から火が出るような羞恥に見舞われる。

杏奈は初心な反応を楽しむかのように、さらに軽い言葉責めで少年の性感をあおっていた。

「包茎チンチン、何度もシコシコしたんだ？」

「あ、あああつ」

「白いミルク、一日に二回も三回も出したのね？」

「はふうううつつ」

情熱的な唇の狭間から発せられる淫語が、甘美な旋律となり、卓郎の理性を蕩かしていく。

「でも、まだ皮が被ったままじゃないの。ちゃんと剥いておかないやだめって言ったのに、忘れたの？」

「も、戻っちゃうんです」

「え？」

「剥いても、パンツにこすれるたびに……元に戻っちゃうんです」
か細い声で答えると、杏奈はさもうれしそうに口角を上げた。

「そう。まだ矯正中なのね。じゃ、先生が剥きグセをしつかりとつけてあげる」

「は、あううううううつつ！」

しなやかな指が肉胴に巻きつき、包皮がゆつくりとズリ下ろされていく。

凄まじい快感が脳天から突き抜け、卓郎は喘ぎながら腰を折った。

白濁の溶岩流が荒れ狂い、噴射口を早々とノックする。

「まだ出しちゃだめよ！」

キッと睨みつけられ、すかさず会陰を引き締めた卓郎は、両足に渾身の力を込めた。女教師のかぐわしい吐息が肉幹にまとわりつき、鈴割れから前触れ液がとろりと滴り落ちる。

「ほら、もう少しで剥けるわよ」

「はうっ！」

包皮が雁首でくると反転した瞬間、卓郎は奥歯を噛みしめ、臀部の筋肉を痙攣させた。

滾る欲望が、腹の奥で活火山のように振動する。

射精感を何とか堪えると、杏奈は満足そうに微笑んだ。

「ふふっ、よく我慢したわね。これからもっと楽しいことが待っているのに、ここで出しちゃったら、もったいないものね」

女教師の淫蕩な顔つきが、凄まじい劣情を催させる。

硬直の肉胴には、針金を巻きつけたような静脈が無数に浮きあがっていた。
(もっと楽しいことって……何をしてくれるんだよお)

期待感に足がガクガクと震え、膝が自然とこすり合わされる。

美しい容貌がペニスに近づいてくると、卓郎は目をカッと見開いた。

(ま、まさか……!?)

ロジジでは初対面にもかかわらず、手コキの洗礼を受けている。

年頃の少年が、口唇愛撫を想像するのも無理はなかった。

艶々とした柔らかい唇が、男の不浄な部分を咥えこむ。ある意味、セックスよりも

刺激的な光景を、何度思い描いてはオナニーを繰り返したことだろう。

もし美麗な女教師がフェラチオをしてくれたら、瞬く間に放出してしまうのではないか。

卓郎の期待どおり、杏奈はプラムのような唇を窄め、真上から大量の唾液を勃起に滴らせた。

(あ、ああああつ！　せ、先生の唾が!!)

凄まじい昂奮が突きあげ、肉棒が歓喜に打ち震える。

小泡混じりの清らかな唾液が、水飴のようにペニスを包みこんでいく。

女教師が見せる淫らな振る舞いに、卓郎は肌を総毛立たせた。

このあとは、いよいよ口での奉仕が始まるはず。

そう思いながら鼻息を荒らげた瞬間、杏奈はレオタードの肩紐に手をかけた。

「清瀬君」

「は、はい」

「先生のおっぱい、見たい？」

「は？」

「おっぱいを見たいか、つて聞いているの」

予想外の問いかけに一瞬呆気にとられたものの、頭の中の口唇愛撫は、すぐさま弾力感溢れる乳房に取って代わった。

「み、み、見たいですっ!!」

杏奈は苦笑しながら左右の肩紐を外し、レオタードの襟元をゆっくりと捲り下ろした。

たわわに実った乳房が剥きだしになり、ババロアのように上下に揺れる。

（お、おっぱいだ！）

眼前に弾けでた生乳に、卓郎は目をひんむいた。

官能的なカーブを描く双乳は、重量感をたつぷりとたたえながらも、決して重力に負けることなく、全体がツンと上を向いている。

やや大きめの乳量の中心には、紅真珠のような乳首が誇らしげに突きでていた。丸々と張りつめた乳丘は、いかにもふかふかしていそうで、思わず手のひらで包みたくなってしまう。

卓郎が顔を切なげに歪めた直後、杏奈は腰を落とし、両手をバストの脇に添えた。まろやかな膨らみが、ペニスにゆっくと近づいてくる。

(えっ!!)

卓郎がびつくりしたと同時に、勃起は物の見事に巨乳の狭間に呑みこまれていた。

「は、はあああああつ！」

ふんわりとした、なめらかな肌が肉幹にまとわりつき、さらに左右から肉の丘陵に圧迫される。

怒張は乳房に覆い包まれ、亀頭の先端が微かに覗き見えるのみ。

(ひよっ、ひよっとして、パイズリ!!)

中学時代の友だちから、パイズリなるプレイがあることは聞いていたが、高校に入学したばかりの自分が経験しようとは考えてもいなかった。

羽毛布団にくるまれていてるような温もりが、下腹部を覆い尽くしていく。

安心感にも似た心地よさに陶然としたとたん、女教師は上体をゆったりと揺すっていった。

「あ……あ、あ」

乳肌がペニスに吸いつくように張りつき、肉胴の表面をやんわりとこすりあげる。

唾液が潤滑油の役目を果たしているのか、やたらすべりがよく、想像していた以上の快美だった。

乳肉が上下するたびに、ニツチュニツチュと淫らな音が洩れてくる。

口元に微笑を浮かべ、上目遣いで見つめてくる女教師の表情がたまらない。

「どう？ 気持ちいい？」

「き、き、気持ち……いいです」

「まだ我慢できそう？」

問われても、卓郎は答えることができなかった。

凄まじい快楽の嵐が下腹部を中心に渦巻き、今は射精を堪えることに全神経が集中している。

これ以上の言葉を発すれば、白濁の塊はすぐさま射出口になだれ込みそうだった。

経験豊富な女教師は、少年の昂奮度など手に取るようにわかるのだろう。

表情を探りながら、乳房のスライドを速めたり緩めたりしている。やがてここぞとばかりに、再び言葉責めが始まった。

「清瀬君のおチンチン、熱いわ。おっぱいの中で、また一段と大きくなってるみたい。いつも、こういういやらしいことを考えてオナニーしていたんでしょ？」

「あ、あああつ」

「ふふつ。キンタマも、キュンキュン吊りあがってるのがわかるわよ」

唇の隙間から淫語が飛びだすたびに、脳みそが沸騰し、心臓が口から飛びでてきそうだ。

卓郎の腰は、まるで操り人形のようにくねっていた。

たぶたぶとした乳丘が絶えず形を変え、しつとりとした乳肌があんま器のようにペニスを揉みこんでくる。

ほくそ笑んだ杏奈は、またもや赤い唇を窄めた。

とろりとした水飴のような唾液が、バスタの谷間に滴り落ち、乳房とペニスの隙間にすべりこむ。

「かはっ！」

よりなめらかな感触が肉胴の表面を走り抜けると、卓郎は狂おしげに内股をこすり合わせた。

「まだ大丈夫かな？　じゃ、こんなのはどうかしら？」

杏奈はネズミをいたぶる猫のような目つきで、豊満な乳房を互い違いにスライドさせた。

「あひっ！」

弾力感溢れる乳丘がグニヤリと変形し、肉筒に隙間なく張りつきながら、猛烈な勢いで揉みこまれる。ペニスの側面がこすりあげられるたびに、鈴割れから前触れ液がピュッと噴きあがる。

汗でしっとりとした乳肌の感触が、指とはまたひと味違う快美を与え、イレギュラーな動きが勃起に苛烈な刺激を吹きこんだ。

クチュンクチュンと、リズムカルな抽送音が響き、きりもみ状の振動が海綿体にまで浸透していく。

「あ……あ……あ」

卓郎の目はすっかり濁り、口は顎の関節が外れたように開いていた。

「あぁん。清瀬君のおチンチン、カチカチよ」



ゆっさゆっさと揺れる乳房を虚ろな瞳で見下ろすなか、会陰がひくつき始め、牡の欲望が発射台に装填される。

爆乳を目いっぱい駆使したパイズリプレイに、卓郎の我慢はついに限界へと達した。

「あ、はあ、せ、先生」

「ん？ 何？」

「も、もう……」

「イキそうなの？」

「イクっ、イキます」

至福の射精は、もうそこまで来ている。

ところが全身の力を一気に解放した刹那、杏奈は無情にも乳房のスライドを中断し、上半身をペニスからスツと離れた。

「あ、あああああっ」

輸精管をひた走っていた精液が、陰囊に向かって逆流する。

氣勢をそがれた卓郎は、やるせなさそうに腰を振らせ、女教師を恨めしそうな目で見つめた。

「だめよ、まだイッチャ」

「が、我慢できません」

「イカせてあげるなんて、言っていないでしょ？」

「そ……そんな」

泣き顔を見せると、杏奈は立ちあがりざま卓郎の手を取り、そのまま壁際へと歩み寄った。

ズボンとブリーフを足下に絡めたままのペンギン歩きは、さぞかし滑稽な姿だったろう。それでも今の卓郎は、男子の本懐を遂げたいという気持ちだけに衝き動かされていた。

（射精できないまま帰されたんじゃ、あまりにも切なすぎるよ。このあと、いったいどうするんだろう？）

部屋の隅には椅子も机もなく、白い壁があるだけだ。

「そこに寄りかかって」

言われるがまま壁を背にすると、美人教師はことさらあだっぼい表情を見せた。

「白いミルク、出したい？」

「だ、出したいです」

「我慢できない？」

「できません！」

「出させてあげてもいいけど、新体操部は続けてくれるわね？」

「そ、それは……」

このとき、卓郎は初めて杏奈の目論見を察した。

彼女は、色仕掛けで退部を阻止しようとしていたのだ。

放出願望とクラブを辞めたいという本音が、頭の中で火花を散らす。

少年の心の迷いを知ってか知らずか、杏奈は突然、目の前で身体を転回させた。

（あああああつ、すごいお尻!!）

はち切れんばかりの豊熟ヒップが、存在感を誇示するようにぶるんと揺れる。

しかもいつの間にかレオタードの布地が臀裂に振りこみ、官能的なカーブを描く尻肉を惜しげもなく晒していた。

まっさらな白い山脈はシミの一点もなく、いつさいの歪みがない完璧な球体には息を呑むばかりだ。

肉感的なヒップは、蕩けるような脂肪をみっちり詰めてこんでいるようだったが、逞しい太腿に支えられ、全体がキュッと引き締まっている。

臀裂の奥底に覗き見える、こんもりとした膨らみが悩ましい。

恥丘に食いこんだ股布の中心に、小さなシミを発見した卓郎は、一瞬にして頭に血を昇らせた。

(せ、先生、ぬ、濡れてる!!)

麗しの女教師は、教え子を苛みながら、自身も昂奮していたのだ。

その事実性欲をあおられた卓郎は、思わず鼻の穴をブワツと広げた。

(したい！ 先生とエッチしたいよ!!)

牡の本能が理性を蝕み、突き刺すような視線が女教師の下腹部に注がれる。

生唾を飲みこんだ直後、どっしりとした桃尻が、卓郎の恥部に覆い被さるようになり、差し迫った。

「あつ……は、はふうふうふうつ」

「ふふ、パイズリの次は尻ズリよ」

杏奈はヒップを裏茎に押しあて、厚みのある腰を左右にスイングさせる。

左右に揺れたペニスは、先端から前触れ液を小水のように溢れさせた。

丸々とした双臀が粘液でぬらつき、みるみるうちに妖しく照り輝いていく。

やがて肉棒は、尻肉の谷間にすっぽりとはまりこんだ。

「あうううううつ！」

締まりのある臀部の感触は、ふつくらとした乳房とはまた違った悦楽を与えた。

圧迫感がより強く、ペニスに受ける刺激も段違いだ。

「清瀬君のおチンチン、先生のお尻にぴつたりとハマっちゃったわよ」

「あ、あううつ」

杏奈は肩越しに振り返り、淫蕩な笑みを投げかけてくる。そして会陰を引き締めているのか、尻肉をキュッキュツと窄めた。

臀裂が肉棒を両脇からやんわりと絞りあげ、鈴口から透明な淫水がじわりと滲みだす。やがて女教師はやや前屈みになり、その場でポールダンスをするかのように、熟れた肉体を上下動させた。

逞しい芯を注入させたペニスが、尻肉の表面でゆつたりとしごかれる。

腰を引こうとしたものの、壁を背にしているために遊びがまったくなく、豊臀の圧力は余すことなく卓郎の下半身に注がれた。

屹立は小さな脈動を打ちつけ、楕円にひしゃげたペニスの頭頂部は先走りでするヌルの状態だ。

「あ、あ……せ、先生」

卓郎は虚ろな視線を宙にさまよわせ、熱病患者のような呻き声を放っていた。

腰に力が入らず、油断をすれば膝から崩れ落ちてしまいそうだ。

少年の悶絶する姿を、女教師は舌なめずりをしながら見つめている。

決して激しい動きは見せず、強弱をつけながら射精感をコントロールしてくるのだから、まさしく寸止め行為と言ってもよかった。

巨尻が上下左右に揺れるたびに、卓郎は頭がおかしくなりそうだった。

欲望のパワーが深奥部で蓄積され、高波と化して、自制という防波堤に次々と打ち寄せてくる。

「も、もう勘弁して……ください」

涙目で訴えた直後、杏奈は身体のスライドを止め、右手を回してペニスを握りこんだ。

天を向いていた勃起を下に押し下げ、一瞬のあいだに股ぐらの中にすべりこませる。「あ、あっ！」

突然の出来事に、卓郎は目を剥いた。

ペニスの上部に当たる、生クリームのようにふんわりとした感触は、恥丘の膨らみに間違いない。

杏奈が身を起こし、背中を預けながら優しい口調で囁く。

「わかる？ 清瀬君のおチンチン、先生のお股のあいだに挟まってるのよ」

「わ、わ、わ、わかりますっ！」

「どんな感じ？」

ペニスを、熱いお湯の中に浸しているような感じだった。

肉胴の両サイドから押しつけられた太腿は、しつとりと汗ばみ、むっちり感を嫌というほど味わわせてくれる。

さらに股間のこんもりとした盛りあがり、杏奈の体温をじかに伝えていた。

ぬくぬくとした温もりはもちろん、心なしか湿り気すら感じる。

レオタードの薄い布地を通し、愛液が滲みだしているのだろうか。

美人教師の体内から分泌された汗、淫蜜、匂い。それらが、すべてペニスにまとわりついているのだ。

杏奈はまだ腰を動かしていないのに、剛直は暴発寸前だった。

「清瀬君の、やっぱ大きいわ。先生のお股から、おチンチンが生えたみたい」

「あ、あ、あ、出したい……出したい」

卓郎の視線は、焦点がまるで合っていない。

女教師は放出願望に苛まれる少年を見据え、最後の決断を迫った。

「新体操部、辞めないわね？　もし続けてくれたら、今よりもっと気持ちのいい思いができるかもしれないわよ」

この状況で、拒絶できる男がいるのだろうか。

卓郎は、間髪をいれずに即答した。

「や、辞めません！　ずっと続けます！　だから、だから……はうっ!!」

新入部員の覚悟を知った杏奈は、どっしりとしたヒップを揺すりまわした。

「男に二言はないわね。それじゃ、たっぷりと出させてあげる。ふふっ、今度のは腿ズリとでも言ったらしいのかしら？」

恥丘の膨らみに両内腿の三点責めは、パイズリや尻ズリの二倍も三倍も大きな快楽をペニスに与えた。

よくぞこれまで腰が動くものだ、と、驚愕するほどのピストンだ。

すでに女教師の股ぐらは、鈴割れから湧出した先走りでぬかるんだ状態だった。

ニッチュヌチュウツという摩擦音とともに、肉胴の表面が苛烈にこすりあげられる。しかも杏奈は、股から突きでたペニスの先端に指先を絡ませてきた。

「ああ、先生っ！　そ、そんなことしたらイッチャいます！」

「いいわよ。スケベ汁、たくさん溜まつてるんでしょ？　先生が全部見ててあげるか

ら、一滴残らず出しなさい」

「はうううううううつ！」

豊かな腰が派手にくねり、指先が敏感な亀頭部を中心に這いまわる。

包皮が男根を往復するたびに、卓郎の頭の中は白い靄に包まれていった。

「あああああつ！ イキます！ イクうううううううつ！！」

指腹がパンパンに張りつめた雁首をなぞりあげた瞬間、欲望の塊はついに腹の奥で大爆発を起こした。

「きゃつ！ 出たつ！！」

濃厚な一番搾りが、鈴口から速射砲のように吹き飛んでいく。

「あららら、すごい勢い」

二発、三発と、ザーメンは勢い衰えることなく、二メートルも先の床に着弾していった。

「ふふつ。若い男の子って、ホントに量が多いのね。ほら、もっと出しなさい」

杏奈はうれしそうに呟き、予告どおり、指先で亀頭を責めたてながら樹液を搾り取っていく。

体内にとどまっていた欲望が消え失せていくと、しなやかな指が皮を髣すように肉

胴の表面をこすりあげた。

尿管内の残滓が、ひと際高く噴出する。

「うう……くくうっ」

「いやだわ……まだ出るの？」

杏奈の呆れた声を遠くで聞きながら、卓郎は徐々に意識を飛ばしていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>